

Title	コメントII① 青年研究者の論文テーマ総括及び中日関係に対する見解
Author(s)	江, 沛
Citation	OUFCブックレット. 3 P.57-P.63
Issue Date	2014-03-10
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/27107
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

コメント

青年研究者の論文テーマ総括及び中日関係に対する見解

江 沛

今回の会議における，王東（日清戦争前の中朝関係 - 1886-1889 年プサン電報線をめぐる争議の事例），鄒燦（盧溝橋事件から第一次近衛声明まで日本の対中戦争認識 - 政策と宣伝の間で），菊地俊介（日中戦争期における在華日本人の対中国認識），王坤（中国側から見る日中経済協力 - 1980 年代における『人民日報』の対中 ODA 報道を中心に），周妍（現代中国知識人の日本認識 - 「対日新思考」をめぐる論争を通じて），馬瑞潔（『人民日報』の日本報道について（2003-2012））などの 6 つの論文は，19-20 世紀の中日関係を論述している。それぞれに特徴があり，いくつかの論文は新たな発想があり，深く考えさせられるものであった。王東論文は，中朝の釜山電報線敷設において中国の朝鮮に対するコントロールを日本が軽減しようとし，朝鮮は通信の自主権を求め，日本は朝鮮に対する圧力が自身の利益となるような裏取引を追求したと論じている。この議論から我々は東アジア 3 国間の利益と矛盾の交錯と衝突を見て取ることができる。鄒燦論文は日中戦争初期の日本の対中政策および戦争認識に対する変化を論じており，この時期は日本の対中政策が順調に進展しており，「中国滅亡論」が高騰する分かれ目であったし，日本は中国に対して事変の解決を追求し続け，戦争を停止する過程でもあったとしている。菊地は抗戦時期の日本人の対中認識の変化の過程を分析している。この 3 つの論文は，日清戦争後の 1895 年から中日関係の変化が最も激しい 50 年間における，東アジア国家関係における中日の競合と，

2 国間における直接的競合に注目しており、見識が非常にあり、今日の中日関係を認識するのに不可欠な基礎であるといえる。このような研究が多くなるにつれて、相互理解が増すと信じている。王坤と馬瑞潔の両者は偶然にも『人民日報』を例として、中国政府或いは主流メディアの対日観を論じ、見解がほぼ同じものとなった。周妍は新世紀初めの中国人民大学の時殷弘、『人民日報』記者の馬立誠などを中心とするいわゆる「新思考」派の言論が引き起こした国内の論争について評論している。個人的には、両者の論文は現在の中日関係の発展に影響する非常に重要な課題、つまり世論誘導をしっかりと意識している。双方の国家の世論は国家の干渉の有無に関わらず、基本的にナショナリズムの立場から離れることはできない。日中の民間や学界はもしかすると理解が異なっており、日本では個々人が公に表現することはありえるけれども、中国では意見表明はネットの論壇の中にあるかもしれず、必ずしも皆が政府と同じ意志を抱いているとは限らない。実はそれが民衆の接触しにくくもありふれた心理なのである。よってこの角度から見れば、メディアは大衆世論を誘導し、その上で国家の政策に影響させ、更には徐々に中日両国関係の駆け引きの道具となっていくのである。また同時に、民衆の意識の固定化が両国関係を進展させる障壁の 1 つとなるのである。このような分析は賞賛に値する。次に、この機会を利用して 19 世紀以来の中日関係に対する私のいくつかの認識を書きたい。多くは中国の角度から見たものである。

1. 19-20 世紀の日本はなぜ中国と戦ったのか？

1000 年以来的中日関係は、中国文明の日本に対する影響によって概括することができるだろう。両国は共に伝統的農業社会にあり、交通の便は悪く、双方の交流は非常に不便であった。双方には国家利益の衝突はなく、国家関係上の好き嫌いや争奪が形成されにくかった。元代には日本に対して進攻し、豊臣秀吉は朝鮮に対して出兵したが、双方の利益は周縁地区において偶発的

に衝突しただけであり、双方の関係に実質的な進展はなかった。近代に入り、日本と中国は相次いで欧米列強に対して門戸を開放させられた。日本は拒絶の中で自身の落伍を意識し、自ら率先して国内市場を開放し工業生産技術を導入した。その結果、「明治維新」によって国力を増強した。工業生産技術を利用するにしたがって、資源と市場は日本の発展の最大のボトルネックになった。まさに経済の近代化それ自体の法則であり、日本の対外拡張を推進させていった。日本は資源が乏しく、国土が狭く、海外から孤立しているという地理的特徴によって、「生存空間」を海外に求めることにし、朝鮮、中国大陸のみに拡張することを決めた。この時、悠久の歴史と文明を自認する中国は、自身と世界の近代文明との間の差を日本のように迅速に意識することが難しく、依然として「体」と「用」の論争の間でもがいており、近代化のプロセスを遅らせることになり、国力において日本と距離が生じた。日本の強さとそれによる拡張が、弱く頑なに閉鎖的であった中国と相対した時、戦争は避けがたいものとなったのである。

2. 中国と日本の国家地位の転換と両国関係の再逆転

1895 年の日清戦争を境界線として、長期に渡って中国を中心としてきた東アジアの政治構造と国家関係システムは、徐々に日本を中心とするものに变化した。この過程は 20 世紀末から 21 世紀初めまで続いた。その要因は 1949 年から 1978 年までの毛沢東時代の中国の自己閉鎖であり、民間の貿易を除けば双方の関係は断絶に近かった。今日から見れば、鄧小平の改革開放政策は現在の世界と東アジアの構造に対する影響が最も大きい事件と見なすことができる。中国はこの後 30 年間、世界に溶けこむと同時に東アジア第 2 位の経済体となった。しかし中国経済の実力が強まり、双方の貿易が増大するにつれて、エネルギー、経済、貿易、生態や体制の摩擦は徐々に多くなり、中日は同じ東アジアに存在する中で、共通の利益はあるものの競争も日増しに増えた。例えば、台湾、ASEAN、釣魚島、東海油田などの問題

である。双方の民衆の心理状態は世論誘導の下で徐々に変動した。21世紀初め、中国は日本が主導する東アジアの構造の地位に対する強力な競争相手となった。これは1895年の後に固定化された中日の国家の地位に重大な変化が生じたことを意味する。この構造変動は中日の国家利益が衝突し、中日関係が悪化するという重要な要素であり、日中は心理状態の比較的長い調整期を必要としている。日本人は心の所在なさを感じるものの冷静であり、非常に強い近代的な民族の素養を見せており、極端なナショナリズムは少数である。中国人は満足しているが落ち着きが無く、全体的な国民の素養は比較的不足しており、急進的なナショナリズムの思想潮流は全国に絶え間なく流れている。一切の戦争を反対する理由の中に、近代意識が道徳中心主義の理念に混ざっていてもいる。

3. 「華夏中心主義」の影の台頭

中国人の伝統的「天下観」の中では、中国人は道徳を指標としており、中国を世界の中心として周囲に同心円を描く方式で世界を認知していた。もしも「夏をもって夷を変える」ことができれば、夷はシステムに入ることができる。よって中国人の世界に対する理解は日本人と異なり、明確な境界線がなく、若干の世界主義的意味がそこに含まれる。1978年以前、中国のアジア・アフリカ・ラテンアメリカ国家に対する無償援助は、ある種の天朝上国的心理状態が内在しており、一種の道徳至上意識が現れている。日本に対する認識では、多くの中国人には近代経済強国の意識はなく、依然として農業社会の面積の大きさや人口の多さなどが国力の強弱と同列に扱われている。心の奥底では時に一種の「小国」的軽視があるけれども、同時に近代以来の中日戦争の傷の大きさによって、日本に対して高度に敏感であり続けている。今日、中国はすでに世界第2位の経済体となっており、GDPの総量という指標は、世界の強国の列に返り咲いたという中国人の誇りを部分的に満足させているし、「天下観」に基づく中国ナショナリズムの思想潮流が極端なナ

シヨナリズムへと変化する基礎ともなっている。この背景において、毛沢東時代はかつて欧米、ソ連、日本に対抗する孤立の外交政策を公のものとし、それが折り悪くいわゆる「憤青」がナシヨナリズムの賛歌を声高く歌い、時代の転換を無視する上での心理的な潤滑剤となってしまったのである。「華夏中心主義」の内部にはやはり一種の天朝上国の心理状態があり、周辺を見下ろす一種の傲慢さがある。また、国際関係を真に平等に扱うことのできない一種の時代遅れの価値観があり、ある種の背景化では、文化・経済ナシヨナリズムへと容易に変貌しやすく、政治保守主義の思想潮流が氾濫する土台となってしまう。

4. ナシヨナリズムが混ざった感情や、国家の立場から距離を取りづら い論争における、客観的になることの難しさ

中日関係に対して、いったいどのように理解すべきだろうか？ 結局のところどのように双方の敵視と誤解を取り除き、戦争に向かうのを避けるべきだろうか？ 歴史的に見れば、現在の中日関係の最大の問題は両国の地位の変化とその趨勢がもたらす大きな影響にある。それが作り出す心理状態の不均衡と不安感が双方の不信感をひどく深めてしまう可能性がある。このような状況は続く可能性があるが、絶え間ない交流の努力によって取り除くことができる。次に、東アジア文明の欠点は政治が社会と民衆を主導することにあり、世論はその中において人徳なく攪拌されることが大きな問題である。どのように双方の国民、特に中国国民に独立して思考させ、国家の政治的制約を超えさせ、人類の発展と文明の進歩から問題を思考させるかという点は、おそらく 1 つのキーポイントとなるであろう。中国において最大の問題は有形無形の「反日教育」にあり、恨みを継続させると同時に、戦争が民衆にもたらした深刻な災禍を省みていないのである。これらの物事は常に存在しており、低下する国民の素養とそれが結合すると、日本に対して善意をもってはっきりと理解するように期待することはできないし、政治家の判断と政策決定に影響を与えるであろう。なら

ば日本はどうだろうか？世論が民衆に影響をあたえることを体制が決定しており、民衆は政治に影響を与えている。もしも、日本は落ち着いたある心理状態が優勢を占めていることを強い態度で表明する必要があるのならば、政治家は世論に適応するだろう。ゆえに戦争を望まない民衆は、知らず知らずのうちに時局の緊張を推し進めてしまう可能性がある。厳格に言えば、歴史問題は現実問題ではなく、現在の中日関係に影響を与える障壁になるべきではない。しかしながら事実はそうではない。一人ひとりが考えなければならないのは、中日の歴史問題はなぜ一向に解決しないのか、ということである。その背後の深い原因は果たして何なのか？中国では、多くの人がこのように考えている。中日関係が良くない原因として、1 つ目は、アメリカが日本を支持しアジアにおいて中国をできるだけ押さえつけるようにしているから、2 つ目は、日本が「普通の国家」になることを追求することは「軍国主義」の道へと再び向かうことを意味しているから、3 つ目は、日本は戦争責任を徹底的に反省しておらず、「軍国主義」と徹底的に縁を切っていないから、というものである。日本ではどうだろうか？この点に関して私はよく分からない。しかし戦後ドイツの各隣国との処理は少なくとも参考にはなるであろう。結局のところ EU 内部では戦争責任と歴史問題は常に語られてはいないようである。中国では、民衆の日本に対する心理状態は非常に複雑である。まず、日本が中国の安全保障上の脅威となることを心配している人々は非常に少ないようだ。しかし、歴史上、中日戦争の暗い影は依然として心の奥底に痛みとして存在している。そして、日本に対する悪意は主に歴史問題が繰り返し発酵されていることが原因であり、日本人は変わりやすい存在であると常に思っている。3 つ目は日本の近代化の成果に対する羨望と、日本国民の素養に対する尊重である。日本では主流の見解が何であるかはよく分からない。もしかすると中国の台頭がもたらす脅威を心配しているのだろうか。要するに、ナショナリズムが混ざった感情から来る思考や、国家の立場から離れ辛い客観的でない論争は、不信と誤解を増進させてしまうだけであるといえる。もちろん私個人の考えでは、時代が 21 世紀へと進んだことによって、国内外の各要素と条件が中日両国の度重なる相互依存と相互矛盾を決定している。また、両国の経済総量が世界第 1 位を占め、世界経

済の中心がアジアに回帰する可能性は、中日が必然的に以前と同じように競争はするけれども両国関係が悪化して戦争には至らないことを決定づけている。幸福な生活、安定した経済、平和共存は、政治紛争を超えた両国民衆の共通する願いであるに違いない。

(和田英男 訳)